
桜日和

龍夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜日和

【Zコード】

Z9343D

【作者名】

龍夜

【あらすじ】

あの日君を見た瞬間自分の何かが変わった。「男なんて皆一緒」そう思つてたのに。ねえ、あのときの自分が今じゃ嘘みたいだよ。君と一緒にいて楽しいなんて思わなかつたもの。どうか、これからも一緒にいてください。

始まり

「ひらひら

舞い落ちながら

くるくる

風と踊る

薄ピンクの花弁は

風と踊る

くるくる

ひらひら

行く先はどこかは知らない
ただ運命に身を任せるだけ

今年も春が来たね。
何回目の春だつけ?
ああ・・・。2回目だ。

2回目の春だね。

あの日からやつと2回目の春か。

今年もよろしくね。

「止まることを
知らない時間
風は時間と一緒に
吹き抜ける
薄ピンクの花弁は
それにあわせて
ただ舞い落ちる

ひらひら・・・

ぐるぐる・・・

全てがなくなるまで」

少しだけ話してあげるよ
私とあいつの出会い
あれはねそう、今と同じ春ださ。
桜の花びらが風と舞つてたんだよ。

春1話

（4月）

「夏絵子（かえいこ）一（いつ）起きて！」

「ん～……。」

「ほら、早く！今日は入学式（にゅうがくしき）でしょ？」

「分かつて（わかつて）…………ふあああ～…………。」

私（鳥居 夏絵子）は今日中学（じゅちゅうがく）に入学（にゅうがく）する。卒業（そつぎょう）したあとなんとか過（くわ）け（くわへ）じてきた春休み（はるみゆ）。でもそれも昨日（きのう）でお終（おしゆう）い。だつて今日（きょう）から中学（じゅちゅうがく）が始（はじ）まるんだもん。卒業（そつぎょう）したつていう感じ（けいじ）は全（ま）くなかった。ただ、長いお休み（おひま）があつて今日（きょう）皆（みな）に会（あ）つ。そんな感じ（けいじ）だつた。でも、

「いない人もいるんだよね…………。」

そう。中学（じゅちゅうがく）は違う（ちがう）子（こ）もいるのだ。受験（じゅけん）というものをして他の学校（がっこう）に行く子（こ）達（たつがし）だ。それに、クラス（くらし）も全部（ぜんぶ）変わる。今までのクラス（くらし）とは違う（ちがう）。同じ学校（がっこう）の人は（ひと）何（なん）人（じん）かだけ。あとは他の学校（がっこう）の人（ひと）。本当（ほんとう）のことを言うと凄（ひど）く心配（こころあわせ）だ。でも、しょうがない。

「夏絵子（かえいこ）一（いつ）バスに乗り遅れ（ちりや）つよ！早くしたくするー。」

「はあーーー。」

小学生（しょうがくせい）のときから朝（あさ）はこんな感じ（けいじ）。私（わたし）、何（なん）故（ご）かよく友達（ともだち）にマイペー

スつて言われるんだよねえ・・・ま、気にしないからいいんだけ
ど。

そんな感じで私は中学に向かった。

「 夏絵子おはよー! 」

中学の校門を過ぎたところで声をかけられた。
そばにお母さんがいたけど、お母さんはそれを見て、

「 私、先に体育館に行ってるからね。 」
と、言つて体育館に行つた。

「 おはよう、葵! 」

葵 大場 葵は小学生のときの大親友の一人。私には大親友が2人いるんだ。なんだかウサギみたいにふわっとして優しい感じの子。でも、それは外見だけで中身は色々なことをはつきり言っちゃうタイプ。それで天然も入ってるんだ。もちろん優しいところもたくさんあるよ!

「 今日、クラスが一緒になるといいね! 」

葵は笑顔で言つた。私は葵の笑顔が大好きなんだ。キラキラ光つて
いるように見えるから。

「 うん。きっとなるよ。 」

私がそういつたとき、

「葵へーー夏絵子へーー！」

ちよつと前で大きく手を振つてゐる女の子がいた。

「あーー！春だーーおーーい。」

そう、前の方で手を振つてゐるのは久保 春菜はるなだった。春も小学生のときの大親友。見た目は男の子みたいだけど、中身は女の子。いつも理想の人とか恋の話をしてくれるんだ。自分の気持ちにとつても素直な子なんだよ。私達はそんな春菜を春と呼んでゐる。

「おはよー！」

春は私達のほうへ駆け寄つてきてやう言つた。

「おはよー！」

「おはよー！」

私と葵はやう言つ返した。

「あのひ、クラスが書いてある紙、もひつてきた？？」

「うう。もう、配られてるの？」

「うう。ウチもまだなんだ。3人でとつに行こひよ。」

「いいよ。」

そういうつて私達は紙を配つてゐる先生みたいな人のほうへ行つた。

「クラスが分かつた生徒は自分の教室へ移動してください！」

何処からか先生の声が聞こえたけど、私は泣きたい気分だった。あの後私達は見ず知らずの先生にクラス表をもらい、自分の名前を探した。ゆっくり、少しづつ私は探した。でも、自分の名前が見つかる前に私は春と葵の名前を見つけた。二人は同じクラスだった。（私は？）

そう思い、そのクラス 2組の名前を順に見ていった。けど、そこに私の名前はなくて・・・。私は一人とは違う5組になった。

「・・・・行こうか。」

春が言った。きっと春は私の気持ちが分かつたんだと思う。

「そうだね。」

私達は昇降口から中に入った。まあ、幸いなのは下駄箱が近いつていうことと、教室が階段上がつてすぐつていうこと。2組は昇降口の隣だから、休み時間でも遊びに行けばいいや。

私は一人で階段を登り、教室に入った。私は自分の席を探し座った。確かに同じクラスの女子は一人しかいなかつた。え～っと・・・。誰だっけ？

「夏絵子！」

私がそんなことを考えていると私を呼ぶ声が聞こえた。見てみるとそこには河内山いとうやま 沙羅さらがいた。沙羅は眼鏡をかけていて、いろいろ

うなことをはつきり言つて、喧嘩をよくする女の子だった。沙羅と同じかあ・・・。私と沙羅は喧嘩したこともあった。でも、そこそこ仲がよくなつてふざけあつたりしていた。

「夏絵子と一緒にクラスがあ・・・。めんどくせつー。」

沙羅はそんな風に私をよくからかうんだ。私もそれにのるんだけどね。

「それはこっちの台詞だって。また沙羅と一緒にか・・。この一年大変だなー！」

「ああ、やひこへー。」

沙羅がにかつと笑つて言つた。きっと今の話は周りが聞いたらこの人は仲が悪いと感じるのかもしれないけど、私達にとつては普通の会話だった。

「よみじへしたくないカジ、よみじへ。」

「ひまぐり」

なんだかんだ言って、結局私達は凄い仲がいいのかもね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9343d/>

桜日和

2011年1月20日03時10分発行